

自分を低い位置に置いて人の話を聞く

一般社団法人アーネスト育成財団
理事長 西河洋一

『経営哲学』として整理した中から「先入観を捨てて、自分を低い位置に置いて人の話を聞く」について報告する。

川の水が流れるのと同じように、情報も高い所から低い所に流れる。人の話を聞く時には、先入観を捨てて自分を低い位置に置いて聞くことを心掛けている。下から見上げていないと求める情報は流れてこないからである。そのような気持ちが無いと、聞いても情報の重要性に気付かず聞き流してしまう。

経営に関わる情報は、自分の能力以上の広くて大きな器を持って視線を低くして謙虚に話を聞くことを心掛けている。企業を成長させるには、部下の器を大きくなるように育てることを心掛けている。人を育てるには、感情を荒立てず良き言葉を選んで、丁寧に接することだ。

次に「人のせいにするな、苦境は自己を正すことにより開ける」と肝に銘じている。経営者になる前のこと、仕事で失敗を多く繰り返していた。

なぜ上手くいかないのだろうかと日々悩んだ。大概是「自分に原因がある」「人のせいになっている」ことに気付くことができた。原因が分かり、その原因を解決すると、仕事をスムーズに進めることができた。

現場監督になると、自分より年配の作業員も使うようになる。年配の人から「生意気なこのペイペイが」と思われてしまい、「こんな監督の仕事は、いい加減にやっしまおう」という気持ちで仕事が進むようになってしまうと、良い建物をつくることはできなくなる。言動や態度や身なりで、相手に魂が伝わってしまう。自分が一番でなく、相手を思う気持ちで接すれば、それも伝わり良い建物を一緒に作ろうとなり、立派な建物が完成する。

「常に低姿勢で威張らない」「常に勉強して、使う人達以上の知識を持つ」「常に仕事に厳しく、なあなあ関係にはならない」「賄賂は絶対に断る」「日々、何事にも感謝する」「相手への気遣いを忘れない」「心を通じ合い良い関係を築く」。

日本人は、全ての物に神が宿り、感謝する八百万の神という考えを持っている。触れ合う人々、そして使わせていただく物に、日々感謝の心を持ち、自らを正して過ごしていくことで、道は開ける。